

「遺愛寺鐘欵枕聽」考

——白居易の詩語が意味するもの——

埋 田 重 夫

〔一〕

『白氏文集』七十一卷のうちには、白居易という人間が七十五年の間に抱えたさまざまな感情が、ある種の濃淡をともなうて詠出されている。彼の場合、一つ一つの作品——詩歌——は、そのまま自己の人格全體を表現するための手段として存在したようである。この意味で『白氏文集』の熟讀者は、同時に白なる個性を愛する人でもあろう。

そうした彼の個性は、とりわけ言語面で著しいものがある。①何を、②いかなることばで、③どのように表現するのか、という問題は、作家と作品との關係を考察するうえで、不可缺の觀點であろうが、その中核になるべきは、②に示した

言語的アプローチであろう。およそ文學作品は“ことば”を抜きにしては語れないからである。白居易文學における詩語の研究は、彼が唐代後半期を代表する大詩人であることと、約三〇〇〇首にのぼる膨大な作品を残しているという二點からして、極めて重要な分野と判斷される。その言語感覺に認められる最大の特色は、徹底した日常性・平易性である。現實の日常生活から懸け離れた難解な語彙は、強く忌避されるべき對象として意識されたように見受けられる。

これらの事實を踏まえて本稿では、白氏の日常生活に直結した詩語でありながら、解釋の錯綜している「欵枕」（撥簾）を取り上げ、主として語義の確定、詩語形成史における性格づけ、の二點について、自分なりの結論を提示したいと思う。それらについての考察は、中國文學研究としての白

居易論・詩語論の範圍を越えて、わが國の唐詩注釋史・白詩受容史の一側面にも關係せざるを得ない興味深い問題を含んでいると言えよう。

(二)

白居易文學の基調が、何よりもその日常性にあることは否定できない。『白氏文集』を構成する諷諭詩・閑適詩・感傷詩・雜律詩などの作品群は、日常生活に直結した題材（素材・主題）を好んで取り上げるし、そこで使用される言語は、唐代の俗語表現を含めた極めて日常性の強いものとなっている。白詩に認められる「欹枕」は、全部で三例指摘することができるが、それらはいずれも、「睡眠」という日常生活の一斷面を描寫するために使用されている。概して彼は、安息の場としての「眠り」を異常なまでに詠うが、そうした傾向は、その病弱體質や人生哲學とも深く關係して、十分に注意されてよい。まず最初に「欹枕」三例を含む三首の作品を引用する。

①「欹枕不視事、兩日門掩關。始知吏役身、不病不得閑。

「遺愛寺鐘欹枕聽」考（埋田）

閑意不在遠、小亭方丈間。西簷竹梢上、坐見太白山。遙愧峯上雲、對此塵中顏。」（病假中南亭閑望）（0184）

②「蕭灑城東樓、遶樓多脩竹。森然一萬竿、白粉封青玉。

捲簾睡初覺、欹枕看未足。影轉色入樓、牀席生浮綠。空城絕賓客、向夕彌幽獨。樓上夜不歸、此君留我宿。」（東樓竹）（0537）

③「日高睡足猶慵起、小閣重衾不怕寒。遺愛寺鐘欹枕聽、香鑪峯雪撥簾看。匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官。心泰身寧是歸處、故鄉可獨在長安。」（香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首、其四）（0978）

①は元和二年（三十六歲）に盤屋で作られた五言古體詩であり、②は元和十四年（四十八歲）に忠州で作られた五言古體詩である。また③は元和十二年（四十六歲）に江州で詠われた七言律詩で、三首のなかでは最も通行性の高い作品となっている。白居易自身の分類に従えば、それぞれ「閑適」「感傷」「律詩」の部に収められている。これら三詩に共通するものは、「安閑自適」の境地として「枕邊」を詠うという意識であろう。①は官吏となつて間もない頃の作品でありながら、束縛の多い役人生活への懷疑が既にはっきりと表出されている。

る。「欹枕・不視事」の「事」が、官僚世界に代表される俗界でのあらゆる雑務を指していることは否定できないであろう。⑩は忠州刺史時代の作品で、白居易が終生愛してやまなかった「竹」を詠じたものであり、「捲簾・欹枕」の對偶表現が、⑨領聯の「く欹枕聽く撥簾看」に近似している點が注目される。

「欹枕」の語義という點から言えば、①⑩⑪の各詩は、「欹枕」の動作によって生じる姿勢が、外界の景物をみるという行為を何ら阻害するものではないとの點で一致している。このことから、「欹枕」なる詩語が、枕邊に側臥している状態を指すであろうことは容易に想像される。詩人の視線は天井にあるのではなく、左右いずれかの方向にあり、またそれが、安眠熟睡のための姿勢ともなっていると結論づけられよう。そしてその視線の延長上に簾すだれの懸っている窓があると考えてこそ、白居易詩⑩の鑑賞は、より自然なものとなるようである。

ところで前述三首のうち、白居易の詩才——特にその天才的な對句能力——がいかになく發揮され、それ故に最も人口に膾炙しているのは、「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁」と題される七言律詩（五首連作詩）であろう。とりわけ⑨に

引用した第四首は、江州時代の白居易の生活や思想を理解するうえで、無視できない作品となっている。元和十年に起こった武元衡・裴度死傷事件は、結果として白居易を江州司馬という地方閑職へと追いやった。皇帝臣下としての正義心からでた行動（上奏文提出）が、そのまま自身の左遷貶謫を招くとは、全く想像もしていなかったに違いない。政界から遠く離れた廬山での三年間は、おのが人生に對する内省洞察のために使われたようである。そうした自己省察の「場」となったのが、ほかならぬこの詩にいう廬山草堂であった。「匡廬便是逃名地、司馬仍爲送老官。心泰身寧是歸處、故鄉可獨在長安。」の句には、江州の地で獲得した人生哲學の一端が直接的に詠われていて注意される。

「達觀」の思想を傑出した對句表現によって述べる本詩は、古來さまざまな人々によって朗誦され記憶され傳達されてきた。一首全體の心象は、對句を重視する七律詩型の機能とも相乗して、非常に完結したものとなっている。しかしその第三句の「遺愛・寺鐘・欹枕聽」に限定して言えば、從來から複数の解釋・注釋が試行されながらも、いまだ定説化されていない状況にあるようである。作品自體の著名度に相反して、詩語「欹枕」への理解は、極めて不安定なものと言わざ

るを得ない。わが國で出版された主要な唐詩注釋書・白詩注釋書の記述内容を整理してみると、その大多數は「枕を欹かたむてる」と訓讀し、④枕に耳をそばだてて聴くとするもの、③枕それ自體をそばだてる（傾ける）とするもの、という二説のいずれかを採用する方向にある。これ以外にも「枕を傾けるようにして聴く」のように、いわば④⑤折衷の立場もあるが、大勢は先の二説で盡きると思われる。④説は中國語としての「欹」の用法を全く無視しており、成立し難いと考えてよい。後述するごとく唐詩全體の用例からも、「欹」に「聞き耳をたてる」との解が認められないからである。訓讀習慣からくる短絡的讀解と、「側耳」なる漢語への連想から生じた誤譯と判斷してよいであろう。「欹枕」（動詞＋事物・場所）を「側耳」（動詞＋感覺器官）と同一系統の語彙と認定することには、おのずから限界があると言わねばならない。

枕（箱枕）そのものを傾斜させるとの⑥説は、中國の代表的な字書・韻書の説明や、「欹傾」「欹側」「欹斜」「欹仄」「欹危」「欹倒」「欹垂」などにみられる「互訓」字の用法に照らして考えると、一定の説得力を持っていると思われる。「遺愛寺鐘・欹枕・聽」「香鑪峯雪・撥簾・看」の對句とも完全に呼應しており、當該詩に加えられる注釋の多くが、B説を

「遺愛寺鐘欹枕聽」考（埤田）

採るのも自然と思われる。しかし「枕を欹かたむける」ことが、結局のところどのような具體的行爲を意味するのかについては、いまだに不明確な部分が少なくない。この點に關して、かつて二、三の興味ある見解が示されたことがある。そのうちの一つは、「欹枕」とは枕を傾斜して頭部を支えること「枕を半回轉する（角枕の一陵を立てる）ことによつて高枕の狀態を求める行爲」「枕を直立してのちそれを傾斜し高枕の狀態を求める行爲」と結論づけるものであり、「欹枕」の語義をめぐる最も早い論考と位置づけられる。しかし「欹枕」を「高枕」の一つと捉える本説は、それがはたして長時間にわたる安眠の姿勢となり得るかという點で、大きな疑問を残していると言える。このことに注目して發表されたいま一つの見解は、「欹枕の際には人は上向き姿勢ではなく左右いずれかの横向きの姿勢で臥している」「眠れぬままに輾轉反側するときに、おのずから生じる枕の傾斜をいう」「姿勢は横向き、枕はなにがしか傾斜していると意識したはずである」と述べるものである。^⑥枕の傾斜を積極的に説く前説に比較して、解釋の比重を横向きの姿勢へと移動している點が興味深い。この説に據れば、「欹枕」の「欹」は、自然に生じる枕の微かな傾斜——あるいは詩人によつて意識されるそのよう

な傾き——を指し示すために用いられているということになろう。先に引用した白居易詩三例の用法——特に作者の視線——とも矛盾が少なく、今日の注釋における最も通行性の高いものとなっているように思われる。

しかし本稿では、『全唐詩』に現れる「欹枕」の用例分析の結果として、第三の解釋を提出したいと思う。白居易の使う三例に限らず、唐詩——狹義の詩歌——で詠われる全ての「欹枕」は、その傾斜する對象が實は枕ではなく人であるとする立場である。結論的に言えば、「欹枕」なる詩語は、人間が枕の上に側臥（横臥）⁽⁷⁾している状態を示すに過ぎない、という假説である。この解釋がもし正しいとするならば、「欹枕」の訓讀は「枕を^{かたむ}く^たてる」ではなく「枕に^{かたむ}く^たてる」でなければならぬ。枕自體が傾斜するという不自然さは、この假説に立つ限り、ほとんど全く成立しないことになる。以下の各章では、この問題を中心にして、さらに詳しく考えてみたいと思う。

(三)

『白氏文集』に「欹枕」が三例あることは既に述べた。そ

れらのコンテキストに照らして考えると、作者が横向きに寝ていることは、おそらく否定できないであろう。そしてその姿勢こそが、白居易の「閑適」世界をよりよく象徴するものであることも、容易に想像されよう。しかし『白氏文集』に認められる「欹枕」(三例)は、その絶對數の少なき故に、これ以上の推測を困難にしている。白居易は「眠り」の場を好んで詠うが、その作品群からも、「欹枕」の語義を明瞭に示す用例は認められない。こうした事實は、この詩語に對する先行注釋の不安定さを生む直接の要因ともなっている。

本節では『全唐詩』『全唐詩外編』などを基本資料にして、詩語「欹枕」「欹」「枕」の語義について、具體的に検討を加えてみたい。そして同時に、「欹枕」に對する私見(假説)の論據を幾つか提出したいと思う。唐詩に現れる「欹」(ㄐㄩ)「枕」(ㄓㄣ)の一般的な用法については、おおよそ以下のよ

[A] 「欹」(ㄐㄩ 平聲)の用法

- ㊸ 形容詞としての用法(欹^{かたむ}いたく) ㊹ 欹案、㊺ 欹帆、㊻ 欹石、㊼ 欹棟、㊽ 欹松、㊾ 欹樹、㊿ 欹葉、㊽ 欹崖、㊾ 欹壁、㊿ 欹荷、など」

⑥動詞（他動詞）としての用法（くを敬ける）（①敬扇、

②敬冠、③醉敬烏帽、④敬烏紗、⑤敬噴、⑥敬梅蓓、

⑦敬紗帽、⑧敬影、など）

〔B〕「枕」（zhěn＝上聲）の用法

③名詞としての用法（zhěn＝上聲）（①琥珀枕、②珊瑚

枕、③芙蓉枕、④白石枕、⑤文石枕、⑥金鏤枕、⑦石

膏枕、⑧木枕、⑨角枕、⑩竹枕、⑪犀枕、など）

④動詞としての用法（zhěn＝去聲）（①枕肘、②枕肱、

③枕股、④枕石、⑤枕戈、⑥枕弓、⑦枕劍匣、⑧枕空

杯、⑨枕書帙、⑩枕棋局、など）

まず「敬」字の最も一般的な語義は、「敬側」「敬傾」「敬斜」などの一連の“互訓”字が示すごとく、事物が傾斜している状態であることが理解されよう。この意味で、「敬枕」をそのまま「枕を敬てる」とする他動詞的解釋は、一定の説得力を持っているように思われる。また「側耳聽」「傾耳聽」に相當するであろう「敬耳聽」の用例が、『全唐詩』の諸卷に全く認められないことは、我國で一部通行している「枕邊で耳を敬て聴く」との説を、一層不安定なものにしていると考えられる。これはおそらく「ソバダテル」という“和訓”

「遺愛寺鐘敬枕聽」考（埋田）

によって生じた誤譯と結論づけてよいであろう。⁽⁸⁾

「敬枕」なる詩語を考察するうえでより注意されるべきは、實は〔A〕の⑥に示した他動詞用法ではなく、その自動詞用法の存在でなければならない。事物そのものを傾斜させるのではなく、人間それ自體が傾斜する——横になる——とする解釋である。立っている人間が横になって寝ることを示す「敬」が、唐詩諸篇のなかになんか見出せることは、本稿が説く假説の蓋然性を保證する第一の根據となるであろう。

①「南京路悄然、敬石漱流泉。」（鄭巢「送人南游」、『全』卷504）

②「幽人帶病慵朝起、祇向春山盡日敬。」（陸龜蒙「自遣詩三十首、其十八」、『全』卷628）

③「閒、敬、別、枕、千般夢、醉、送、征、帆、萬里心。」（羅隱「宿荊州江陵驛」、『全』卷658）

④「雙澗水邊敬、醉石、九仙臺下聽風松。」（徐鉉「送孟賓于員外還新塗」、『全』卷756）

⑤「時提祖師意、敬石看斜陽。」（常達「山居八詠、其三」、『全』卷823）

⑥「自掃青苔室、閒、敬、白石看。」（齊己「題終南山隱者室」、

『全』卷 339)

⑦ 「閒、欵太湖石、醉、聽洞庭秋。」(齊己「寄松江陸龜蒙處士」、

『全』卷 843)

⑧ 「涼多夜永擁山袍、片石閒、欵不覺勞。」(齊己「秋夕書懷」、

『全』卷 845)

①から⑧までの用例は、いずれも唐代後期から五代にかけて活躍した詩人によるもので、特に晩唐の齊己が三例と多用している點が興味深い。これらの作品にみえる「欵」は、その文脈からも、自動詞と考えざるを得ない。現代中國語でパラフレイズすれば、「横躺着」「横臥着」とでも言うべき用法であろう。「石」「白石」「片石」「醉石」「太湖石」に「欵わる」のは、例外なく詩人その人である。「(欵) プラス(場所を示す名詞)」構造は、「欵・枕」にもそのまま適合しており、このことばの意味を考えるうえで、重要な示唆を與えている。こうした睡眠姿勢を指示する「欵」の用法は、「欵坐」「閒欵」「欵眠」などの複音節語彙にあって、一層顯著なものとなっている。その典型例が、以下に挙げる「欵眠」(欵よみわって眠る)を含む作品であろう。

⑨ 「素琴絃斷酒瓶空、倚坐、欵眠、日已中。誰向劉靈天幕內、更當陶令北窗風。」(李商隱「假日」、『全』卷 540)

李商隱作の本詩は、休暇中の閑適生活を詠う七言絶句であるが、第二句目の「倚坐・欵眠・日已中」は、「欵」字の用法を最も明確に示している。⑨にみられるように、「欵」が「倚」に對應する動作として詠われていることは、十分に留意されてよい。「欵眠」の語は、李商隱のみならず、顧況・權德輿・韓愈・方干・褚載・秦尙運・齊己などの詩歌作品にも見出せるものであり、決して特殊な語彙ではなかったと思われる。これらのことから「欵枕」の「枕」は、「欵」なる動作が達成される場所を表わしている、と理解するのが自然であろう。「欵」自體に自動詞用法が確かに存在していることを考えると、枕そのものを欵かたむけるとする一般的解釋は、極めて不自然かつ不安定であると判斷されるわけである。

「欵枕」に關して言及されるべき第二のポイントは、枕を傾けると解釋した場合、理解不能な作例が少數ながら存在するという事實である。「欵枕」が、のんびりと氣ままに横になる安眠の姿勢であることは、白居易詩などの文脈からも全く疑問の餘地がない。詩歌作品から指摘できるこれらの事實

と枕それ自體の安定した形狀⁽⁹⁾を併わせ考えると、枕を傾斜させたまま長時間の安眠熟睡を得ることは、物理的にも生理的にもほとんど不可能であると言わねばならない。こうした觀點に立つ時、以下に紹介する二首は、興味深い作例として位置づけることができる。

⑩「永日、一、欹枕、故山雲水郷。」(杜牧「長興里夏日寄南鄰避暑」、『全』卷526)

⑪「永日、還、欹枕、良宵亦曲肱。」(齊己「永夜」、『全』卷81)

杜牧と齊己の「欹枕」は、長時間の睡眠に耐えるゆつたりとした姿勢を描寫するものであって、枕それ自體を積極的かつ持續的な意志によって、終日欹け續けることを詠うものではない。もしそのように讀解するならば、この二首全體の雰囲気は、著しく偏ったものとなってしまう。安閑自適なるわが身を象徵させるものとして「欹枕」が使われているからである。⑩⑪の用例は、中國語としての「欹枕」の語義を正確に把握するうえで、特に強調されねばならない。

論據の第三として確認されるべきは、「欹枕」をめぐる對偶表現である。唐詩に詠われる「欹枕」を注意深く整理してみると、そこにはさまざまな對句モデルを指摘することがで

きる。それらの作例のなかには、前引の白居易作「東樓竹」〔537〕「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首其四」〔978〕のように、「枕」と「簾」を對にして詠うものもあるが、いま注目すべきは、「欹・枕」に呼應する自動詞用法の對句表現である。檢索できた六例を提示する。

⑫「松風欹枕夜、山雪下樓時。」(杜荀鶴「送紫陽僧歸廬岳舊寺」、『全』卷691)

⑬「驚夢緣欹枕、多吟爲倚廊。」(韋莊「和鄭拾遺秋日感事一百韻」、『全』卷697)

⑭「旅館移欹枕、江城起倚樓。」(黃滔「河南府試秋夕聞新雁」、『全』卷706)

⑮「直在引風欹角枕、且圖遮日上漁船。」(徐夔「溪上要一隻白簾扇蓋頭垂釣去年就節推侍御請之蒙惠一柄紫花紋者雖則鱗華具甚批薄不及清源所出因就南郡陳常侍請之遂成拙句」、『全』卷708)

⑯「夜靜倚樓悲月笛、秋寒欹枕泣霜砧。」(劉兼「秋夕書懷」、『全』卷766)

⑰「欹枕松窗迴、題牆道意新。」(貫休「劉相公見訪」、『全』卷830)

これらの詩歌作品にあって、「樓」「廊」「漁船」「牆」の各名詞は、その直前にある動詞によって生じる動作の最終歸着點を意味しているに過ぎない。日本語で言えば、いずれも「(〓の場所)に(〓の動作)をする」と譯出すべきコンテキストである。これは、對語の「欵・枕」も同じ構造をとるとの直接的證據とはならないであろうが、「枕に欵くまわる」との見解を間接的に補強する材料として、やはり看過できないと思われる。「欵枕」と對偶化する語は、その大多數が他動詞 (transitive verb) と普通名詞 (common noun) の結合句——「NをVする」——であるが、⑫⑬⑭のように、動作・行為の及ぶ場所を賓語によって示すケースがあることは、「欵枕」論において必要不可欠な視點と考えられよう。従前の「欵枕」をめぐる論考は、これらの用例と用法(中國語の動賓結構)を見落しており、その結果として論旨の展開が、限定されたものとなっている。

「欵枕」私説を支える第四の、そして最も重要と思われる根據は、語彙レベルでのそれである。いわゆる「閨怨詩」「閑適詩」を含めて、唐代詩人が枕邊を詠出する作品は相當な數量にのぼるが、それらの諸篇には、枕邊での睡眠姿勢を示す語彙が數多く認められる。「動詞」+「枕」の品詞構造を

とる單語グループのなかで、特に自動詞用法のものとしては、「側枕」「居枕」「歸枕」「臥枕」「伏枕」「就枕」「安枕」「著枕」「接枕」「倚枕」「依枕」「眠枕」「支枕」などを擧げることができる。これ以外に他の用例があるかも知れないが、自動詞の用例は以上でほぼ盡きるであろう。これらの常用語彙にあって、枕に側臥している状態を明確に表わすのは、「側枕」一例に止まる。「臥枕」「伏枕」の二語は、ある種の睡眠姿勢を印象づけるが、決して横臥の貌さまを意味するものではない。また枕にもたれて寝ることを示す「倚枕」「依枕」は、横向きに寝ている詩人の姿を表現するには、心象効果がいま一つ微弱なものとなっている。漢魏六朝から隋唐五代に到るまでの長い古典詩歌史にあって、枕邊に横臥することを指示する常用詩語が、「側枕」(cè[k]zhěn)一例に限られる事實じじつは、「欵枕」(qu zhěn)なることばとの關係において、極めて注目値すると言えよう。唐代に入つて次第に、絶句・律詩・排律などの近體詩型が確立され普及するわけであるが、そうした詩律嚴守の趨勢のなかで、仄聲(入聲)字「側」に對應する平聲字「欵」の出現は、それはそれとして必然の方向であつたと推測される。枕邊への側臥を示す詩語は、近體詩で用いる場合を含めて、最低でも「側枕」(仄仄)「欵枕」

髮短梳未足、枕涼閒且欹。……」（杜牧「秋思」、《全》卷523）

⑬「……梅向好風惟是笑、柳因微雨不勝垂。雙溪未去饒歸夢、夜夜孤眠枕獨欹。」（唐彥謙「寄懷」、《全》卷672）

⑭「……煙重迴蕉扇、輕風拂桂帷。對碑吳地說、開卷梵天詞。積水魚梁壞、殘花病枕欹。……」（陸龜蒙「獨在開元寺避暑頗懷魯望因飛筆聯句」、《全》卷793）

⑮「席簾高捲枕高欹、門掩垂蘿蘸碧溪。閒把史書眠一覺、起來山日過松西。」（處默「山中作」、《全》卷849）

⑯から⑰までの用例をみる限り、平聲の共通韻母で脚韻を踏むために、「欹」と「枕」とが轉倒したことは否定できないであろう。唐詩全體にわたって、側臥姿勢を表わす「欹枕」用法が廣く浸透定着している事實を考えると、これら「枕欹」の用法も、「枕邊に欹わる」方向で解釋するのが自然と思われる。また⑱「枕欹獨聽殘春雨、夢去空尋五老雲。」（李中「吉水縣依韻酬華松秀才見寄」、《全》卷749）、⑲「景晏枕猶欹、酒醒頭懶擲。」（崔子向「落山春暮會顧丞茗舍聯句效小庾體」、《全》卷794）の二例は、押韻字としての用法には含まれないが、その對句表現からみても、枕そのものを傾斜させると讀むことには抵抗を感じる。正確な語法に従って記述される散文言語とは違

って、中國の韻文言語——特に詩歌に適用される言語——は、人爲性・拘束性の強い對句や詩律の枠組みのなかで、詩人の心象風景を緩やかに點綴するための手段として存在しているようである。詩歌のこうした柔軟性のある文法構造は、とりわけ近體詩の領域で一層著しいものとなっている。「枕欹」表現を考究する際、それが散文文脈なのか韻文文脈なのかという問題は、「欹枕」なることばの本質を把握するうえで、重要なポイントと言えるだろう。逆説的に言えば、「欹枕」「枕欹」の二語は、中國の詩語の持つ特殊な性格を、それぞれに最もよく標徴していると言えるかも知れない。

本節では、「欹枕」私説を支える論點を五つにわたって述べてきた。「枕を欹てる」とする舊解は、唐代詩歌史・唐代詩語史の實態にそくしてみると、ほとんど全く成立し得ないと考えられる。枕を傾斜させる行爲は、既にそれ自體として矛盾をかかえているが、もしそのように解釋するならば、「欹枕」を含む多數の作品の情感は、大きく變質してしまうであろう。それら「欹枕」の多くは、束縛から解放された人間の充足感——安閑・安眠の世界——を詠うものとして使用されているからである。それは「枕を欹てる」というある種の積極的な營爲を指すのではなく、「枕に欹わる」という必要最

低限度のエネルギーによってもたらされる現状充足の姿を示すものでなければならぬ。こう考えてこそ、閑適の場に執着した白居易らの情感は、より正確に理解されるのだと言えよう。

〔四〕

中國文學における詩語は、大局的にみて、廣義のものと狹義のものに分類される。前者は、詩歌作品に用いられる全ての言語を意味するであろうし、後者は、散文分野ではほとんど使われない言語——例えば特殊なイメージや音聲的工夫の施されたことば——を指示しよう。この基準に據れば、まさしく「欽枕」は、狹義の詩語（純粹な詩語）に位置づけられる。それ故このことばには、ある種の獨特な心象が付與されているとも言えよう。

ここでは、唐代詩語史における「欽枕」の位相について、主に詩人と詩語との関係から考えてみたいと思う。一つの詩語の形成・繼承の諸相は、語義の確定という問題と平行して、やはり重要な課題を含んでいると判断されよう。詩語への嗜好は、詩人の個性や時代の風潮と密接に結びついてお

「遺愛寺鐘欽枕聽」考（埤田）

り、ある意味で、文學史の流れを的確に反映していると考えられる。言語を通してその時代を把握するという方法は、特に唐詩という完成された韻文ジャンルにあって、非常に有効なものとなっているようである。まず最初に、『全唐詩』において二例以上の「欽枕」を詠う詩人を列挙する⁽¹⁵⁾。配列順序は、おおむね『全唐詩』にならう。

- ④李端(2)、⑥司空曙(2)、⑦權德輿(4)、⑧劉禹錫(3)、
 ⑨白居易(3)、⑩陸龜蒙(2)、⑪方干(8)、⑫羅隱(2)、
 ⑬秦韜玉(2)、⑭鄭谷(2)、⑮韓偓(3)、⑯吳融(3)、⑰
 杜荀鶴(3)、⑱徐夤(2)、⑲李中(2)、⑳劉兼(5)、㉑貫
 休(3)、㉒齊己(2)、㉓馮延巳(3)

一瞥してすぐ指摘できることは、「欽枕」を愛好する詩人の大多數が、いわゆる中唐期から晚唐期にかけて活躍した人々であることであろう。特に晚唐詩人の中心とも言うべき陸龜蒙・方干・羅隱・鄭谷・韓偓・吳融・杜荀鶴らが、みな等しく「欽枕」を詠うことから、この詩語の流行が唐代の後半にあったことは否定できない。また現在にまで傳承される總作品数の少ない方干や劉兼——いわゆるマイナーポエツト

——が、それぞれ八例、五例もの「欹枕」を用いている事實は、十分に留意されてよいであろう。この詩語の晩唐詩壇への浸透度の強さを如實に示すからである。杜牧や李商隱が「欹枕」を一例使用していることは、こうした推測をさらに確かなものとしているようである。傳承されずに散佚してしまった中晩唐詩人の膨大な詩歌作品を考慮すると、當時における「欹枕」愛用の風潮は、おそらく決定的であったと考ええてよいであろう。

中國中世詩歌史にあつて、「欹枕」なる詩語を最も早く用いたのは、大曆十才子に數えられる李端と司空曙である。⁽¹⁶⁾彼らは「欹枕」をそれぞれ二つ詠うが、その大部分は嚴格な對句のスタイルをとっている。

② 「欹枕鴻雁高、閉關花藥盛。」(李端「贈薛戴」、『全』卷284)

③ 「欹枕聞鴻雁、迴燈見竹林。」(李端「宿山寺思歸」、『全』卷285)

④ 「聞蟬晝眠後、欹枕對蓬蒿。」(司空曙「閒園書事招暢當」、『全』卷292)

⑤ 「長簾貪欹枕、輕巾懶挂頭。」(司空曙「苦熱」、『全』卷293)

李端たち以前では、李白作と傳えられる「清平樂三首其二」(「欹枕悔聽寒漏」)に用例があるが、この「詞」は五代における偽作と考えられるので、やはり李端・司空曙の二例が、「欹枕」の初出と考えてよいであろう。従来の唐詩注釋においては、白居易の用例のみが強調される傾向にあるが、詩語史の實態に照らして言えば、白居易は「欹枕」の創始者ではなく、繼承者の一人に過ぎない。韓翃・盧綸・錢起・李端・吉中孚・司空曙・苗發・崔峒・耿湋・夏侯審によって構成される大曆十才子は、特に律詩などの韻律を整備した功績で高く評價されるが、新しい詩語の開発にあつても、注目すべき成果をあげている。「欹枕」は、その典型的な事例であると考えてよい。

大曆の十才子を起點として「欹枕」は、その後、白居易(三例)・元稹(一例)・劉禹錫(三例)・武元衡(一例)・賈島(一例)などに代表される中唐詩人に繼承され、晩唐期になると、より廣くより多くの詩人によって使われるようになる。そうした流れは、無可(一例)・皎然(一例)・貫休(三例)・齊己(二例)などのいわゆる「詩僧」グループにまで擴大してゆき、このことばの受容は、より普遍的なものとなつていったように觀察される。晩唐詩人たちにとって「欹枕」

は、もはや特異な語彙ではなかったのである。彼らにとってこの詩語が、決して特殊なものでなかったことは、「欹枕」それ自體を詩題にする鄭谷の作品（『全』巻676）によっても、はっきりと窺い知ることができる。

欹枕、高眠、日午春、酒酣、睡足、最閒身
明朝會得窮通理 未必輸他馬上人◎

春の時節、枕邊に晝時までよこた欹わって熟睡できる自分の境遇と、早朝から宮中に出勤しなければならぬ役人——「馬上人」——の生活との對比を詠う本詩は、明らかに白居易の説く「閑適世界」に直結している。「欹枕」はいわば、その精神世界の表象として用いられていると言える。唐詩のなかで「欹枕」を題材——素材ではない——にするのは、鄭谷の一首に止まるが、この詩は、詩人社會における詩語「欹枕」の安定・定着を考えるうえで、看過できない作品となっている。

安祿山・史思明の反亂を境にした唐代後半には、一般に詩歌のなかに大量の俗語系語彙が流入してくるわけであるが、「欹枕」はそうした俗語化現象とは別の意味で、唐代詩語史の一面面を反映しているようである。唐代後期の詩人たちに

「遺愛寺鐘欹枕聽」考（埤田）

よる閑適的世界への志向・憧憬は、當然の結果として、詩語「欹枕」の流行をより強く促進したのだと言えなくもない。この點に關連して中唐以降、自己充足としての睡眠の場を詠出する作品が増加することは、特に注意されねばならない。題材の擴大深化は、おのずと新しい詩語の出現定着を促したと言えよう。

「欹枕」論に關連して叙述されねばならないもう一つの問題は、「欹・枕」に呼應する對偶表現のバリエーションである。唐詩における「欹枕」は、一句單位のものと二句單位（對句）のものとにそれぞれ詠われるが、後者にみられる對語モデルは、極めて多種多様なものとなっている。「欹枕」に對するそれら對語表現の大勢は、他動詞としての用法であり、主要なものとしては「卷簾」「閉關」「迴灯」「上帆」「抱琴」「杖藜」「持杯」「覆棋」などを指摘することができる。全體の傾向から言えば、「欹」には「卷」（捲）、「枕」には「簾」が、より多く對應する方向にあると言える。もう一つの對語モデルは、既に前節で言及した自動詞用法としてのそれである。「挂頭」「棹舟」「下樓」「倚廊」「倚樓」「題牆」などの對語は、嚴密な對偶構造のなかで「欹枕」に對應している。「欹枕」の語義を解明するうえで、これら自動詞の用

法は無視できないと言えよう。「欹枕」の對語モデルは、主として五言律詩や七言律詩という唐代後期の流行詩型との連用によって、飛躍的に量産されていったと考えられる。對偶表現を重視する律詩の流行が、同時に「欹枕」の對語モデルを複雑かつ豊富にしていたことは否定できない。中國古典詩に現れる詩語は、相對的に題材のみならず様式からも、一定の影響を受けていると判斷されよう。

白居易が「欹枕」の創始者でないことは既に述べた。この詩語が大曆年間の主要詩人によって用いられた始めた頃、白居易は北中國にあって、まだ八歳にも満たない少年であった。この語彙に關する限り、彼は元稹・劉禹錫らと同じように、初期の繼承者に過ぎない。『白氏文集』のうちには、「拂枕」「伏枕」「推枕」「抱枕」「轉枕」「側枕」「臥枕」「高枕」などの語が認められるが、「欹枕」は、それら共通語彙の一つとして使われたと言つてよいだろう。白居易による造語という觀點から言えば、それは「欹枕」ではなく「撥簾」でなければならない。『全唐詩』のなかには、簾についてのさまざまな表現が詠われているが、「撥簾」なる用例は、白居易の「香鑪峯下新卜山居草堂初成偶題東壁五首其四」〔0978〕を除いて、一例も見出すことができない。垂れ下がっている簾をあげる

ことを示す「卷」「捲」「揭」「拂」「押」などの動詞は、唐詩作品のなかで實に頻繁に認められるものであるが、「簾」に及ぼす動作として「撥」が詠われるケースは、全く指摘できないのである。「遺愛・寺鐘・欹枕聽」「香鑪・峯雪・撥簾看」の領聯では、平聲の「欹」(yī)に對して仄聲の「撥」(bō)〔入聲〕が配置されており、七律の平仄式を遵守したものとなっている。仄聲字ならば、他にも「卷」「捲」(juǎn 上聲)「拂」(fú 入聲)が可能であろうが、白居易は敢えてここに「撥」字を使用したと思われる。おそらくその理由は、「欹枕」の語義とも密接に係っているであろう。枕に欹よたわるという行為は、エネルギーを消耗させない「安閑自適」の境地を意味している。そうした動作に連續する「撥簾」は、簾をきちんと捲きあげるような積極的なそれではなく、消極的なエネルギーによってすぐに達成される所作でなければならぬ。枕邊に側臥よたしている白居易は、その寝たまゝの姿勢で傍らの窓に懸かかっている簾——防寒用なのである——を、軽く片手で撥かかげたのである。そのように解釋してこそ、閑適・獨善・安眠・安逸を詠う本詩の趣は、一層正確なものとして讀者に傳達されるようである。もしこの二語を、「枕を傾ける」「簾を捲く」と解するならば、白居易の説く一種の“慵”

の気分をともなった“自己充足”の場合は、異質なものに變化してしまふであらう。詩語の選擇に嚴しい白居易の個性は、「欹枕」「撥簾」の活用にもはっきりと投影されていると言える。

〔五〕

本稿では、『全唐詩』によって檢索した個人メモを基本資料にして、①「欹枕」(「撥簾」)の語義確定、②唐代詩語史におけるその位相、の二點について考察を加えてきた。またそれらに平行して、白居易なる詩人にとって、この詩語がいかなる意味を持つのか、という問題についても言及してきた。各節で展開した議論をここで再整理すると、おおよそ以下に述べる五點になるだろう。

- ① 一般に「欹枕」の語義については、(a)枕で耳を傾ける、(b)枕そのものを傾ける、の二説があるが、用例・語彙・語法次元の分析から歸納すると、いずれも矛盾點や不自然さが多く、ほとんど全く成立し難い誤譯であると考えられること。

「遺愛寺鐘欹枕聽」考(埤田)

② 動賓結構句の「欹枕」は、自動詞——「くくする」——としての用法であり、枕邊に横臥している詩人の安眠姿勢を示しているに過ぎない。それ故に、もし訓讀するならば、「枕を、そだ敬てる」ではなく、「枕に、そだ敬てる」「枕に、よこた敬わる」とすべきであること。

③ 現存資料における「欹枕」の最も早い用例は、李端・司空曙・楊凌などの大曆年間(766-777)の詩人であり、白居易はこの詩語の繼承者に位置づけられる。そしてこの語彙に對する嗜好の流れは、中唐から晩唐の詩人社會に急速に擴大していき、唐代後期に到っては決して特異なことではなくなっていた、ということ。

④ 白居易によって生み出された詩語——いわゆる造語——は、「欹枕」の對語として用いられている「撥簾」であり、それは『全唐詩』に一例も見出せない極めて特殊な語彙と結論づけられること。

⑤ 白居易にとって「欹枕」(枕に側臥する)「撥簾」(簾を軽くかかげる)の二語は、閑適・獨善・安眠・安逸によって達成される“現狀充足”の場を、よりよく象徴するものとして特別な意味をもっていたということ。

白居易が最も忌避し嫌惡したものは、さまざまな場における極端なまでの偏重性（偏りの感覺）である。そうした彼の人格は、「居易」「樂天」というその諱や字に最もよく現れている。彼は文學者としても政治家としても家庭人としても、「常識」「や」「平凡」というものを極めて大切にして生きた人のように觀察される。彼の人生にあつて睡眠は、その病弱な體質とも關係して、重要な意義を持つものであった。白居易にとつて眠りは、精神的にも肉體的にも安定・充足を意味するものであった。「閑」にして「適」なる時、白居易はより多く睡眠の場にいたようである。白居易を取り巻くこうした環境を考えれば、詩語としての「欹枕」「撥簾」の使用・創造は、いわば當然の結果であつたと言えよう。白居易以外にも「欹枕」を多用する詩人が相當數いながら、白詩の用例（三例）のみが強調されることは、また一面で、中晚唐詩における白居易文學の比重の大きさを示唆していると考えられよう。白の文學は、唐代後半のその一つの規範——集約體——として存在したようである。

〔註〕

（1） 本稿では便宜上、本文・引用文は全て「欹」字に統一す

る。ただし白居易の用例については『那波本白氏文集』（四部叢刊本）に依據して「欹」字を用いる。また白詩の作品番號は、花房英樹『白氏文集の批判的研究』（朋友書店、一九七四年七月）收載のものをを用いる。

（2） 白居易が「竹」を愛した點については、「養竹記」〔147〕（『那波本白氏文集』卷二十六）に詳しい。

（3） 各説における異同の所在・類別・論據については、『校注唐詩解釋辭典』（大修館書店、一九八七年十一月）の四六一—四六三頁で言及したことがある。

（4） 三木克己『中國文學論集』（春秋社、一九八〇年十月）の二三八頁では、中國の枕の底面は弧形であるため横臥すれば自然と傾く、とする鈴木豹軒（虎雄）説を紹介するが、その根據は全く述べられていない。注（9）を参照のこと。

（5） 工藤篁「欹枕」について（『中國語學』七十二號、一九五八年三月、後に『中國語を學ぶ人へ——創業の詩』（一水社、一九七五年）に收載）、戸川芳郎「欹枕について」〔補論〕（『汲古』第十四號、汲古書院、一九八八年十二月）など。

（6） 岩城秀夫「遺愛寺の鐘は枕を欹てて聴く」（『國語教育研究』第八號、廣島大學教育學部光葉會、一九六三年十二月）。

（7） 私見と同様の立場を採るものとしては、張惠先『唐詩一百首』（中華書局、一九八七年一月）を指摘することができる。その一三九頁の注釋では「欹枕、斜側在枕頭上、欹通敲、傾

斜。」とある。しかしその論據については全く言及されていない。

- (8) 「枕邊で耳を^{そで}敬てる」解釋が全く成立し得ないことは、以下の用例からも明らかである。①「遶砌紫鱗^{そで}敬枕釣」(「方干湖北有茅齋湖西有松島輕棹往返頗諸素心因成四韻」、『全』卷650)、②「閒^{そで}敬別枕千般夢」(羅隱「宿荊州江陵驛」、『全』卷658)、③「^{そで}敬枕高眠日午春」(鄭谷「^{そで}敬枕」、『全』卷676)、④「且應^{そで}敬枕睡清晨」(韓偓「早起探春」、『全』卷681)、⑤「羨君公退歸^{そで}敬枕」(杜荀鶴「題汪明府山居」、『全』卷692)、⑥「^{そで}敬枕夢魂何處去」(劉兼「命妓不至」、『全』卷766)、⑦「^{そで}敬枕常多夢鮑昭」(齊己「寄益上人」、『全』卷845)。

- (9) 現在、墓などから出土している最古のものは、北宋期の陶枕(死者に對する祭祀用のもの)に限られるが、それらの形状(枕底)は、いずれも非常に安定している。祭祀用の陶枕と日常生活用の箱枕とは、同一に論ずることはできないが、古代中國における枕一般の形状を推測するうえで、補助資料となるであろう。詳しくは「鎮江市博物館藏宋影青瓷枕」(『文物』總二七〇期、一九七八年第十一期)「濟源縣文物保管所藏兩件宋三彩枕」(「北京房山縣出土宋三彩枕」)「河南林縣的兩件北宋瓷枕」(『文物』總二九六期、一九八一年第一期)を参照。

- (10) 本詩は許渾の「長興里夏日南鄰避暑」(『全』卷530)と重複

「遺愛寺鐘^{そで}敬枕聽」考(埤田)

するが、ここではとりあえず、杜牧の作品として處理する。兩首とも若干の文字の異同がある。

- (11) 「^{そで}敬枕」と同義の「側枕」例としては、「側枕對孤灯、衾寒不成寐。」(李羣玉「登宜春醉宿景星寺寄鄭判官兼簡空上人」、『全』卷568)などが挙げられる。

- (12) 「司」字のアクセント(ㄷ)については、宋の洪邁『容齋隨筆』卷一「司字作入聲」條、明の胡震亨『唐音癸籤』卷二十四「詰箋九」にそれぞれ指摘がある。

- (13) 念のために言えば、本稿では狹義の詩語としての「^{そで}敬枕」を考察の対象にしており、詞語としての「^{そで}敬枕」については直接には言及しない。「^{そで}敬枕」によって示される側臥姿勢は、おおよそ、①ゆったりとくつろいだ^{さま}貌(悠々自適の状態)、②憂愁のため輾轉反側する^{さま}貌(悶々として寝つかれない状態)に分けることができるが、詞の世界では、より多く②の方向に傾いて使用されている。また「^{そで}敬枕」本義は、詞においては擴大轉化されている可能性がある。①「曉月墜、宿雲微、無語枕頻^{そで}敬、夢回芳草依依、天遠雁聲稀……」(後主煜「喜遷鶯」、『全』卷889)、②「雲鬢墜、鳳釵垂、髻墜釵垂無力、枕函^{そで}敬……」(韋莊「思帝鄉」、『全』卷892)、③「……人不在、燕空歸、負佳期、香燼落、枕函^{そで}敬……」(歐陽炯「三字令」、『全』卷896)。詳しくは注(6)所掲論文を参照。

- (14) 詩的表現としての「^{そで}敬枕」が「^{そで}敬枕」義であることは、本

文⑧に引用した齊己詩の用例が傍證となろう。

- (15) 「欹枕」を一例のみ使用するものには、孟昶・胡曾・楊凌・武元衡・元稹・杜牧・許渾・李商隱・薛能・賈島・李頻・司空圖・唐彥謙・韋莊・黃滔・成彥雄・廖融・無可・皎然・廣利王女・盧綰・後主煜・後蜀主孟昶・溫庭筠・魏承班・歐陽炯・耿玉真（以上、『全唐詩』・張祜・韋洵美（以上、『全唐詩外編』）などがある。

- (16) 大曆期の詩人である楊凌にも「中禁鳴鐘日欲高、北窗欹枕望頻搔。相思寂寞青苔合、唯有春風啼伯勞。」（「卽事寄人」、『全』卷291）の作例がある。

- (17) 「絕妙詞選曰、唐呂鵬退雲集、載太白應制詞四首、以後二首無清逸氣韻、疑非太白所作、故只存其二。胡應麟筆叢曰、太白清平樂蓋五代人僞作、因李有清平調、故贗作此詞傳之。」（清代王琦注『李太白全集』卷三十「詩文拾遺」）。

- (18) 白居易文學における「疾病」の意味については、小稿「白居易詠病詩の考察——詩人と題材を結ぶもの」（『中國詩文論叢』第六集、一九八七年六月）を参照されたい。